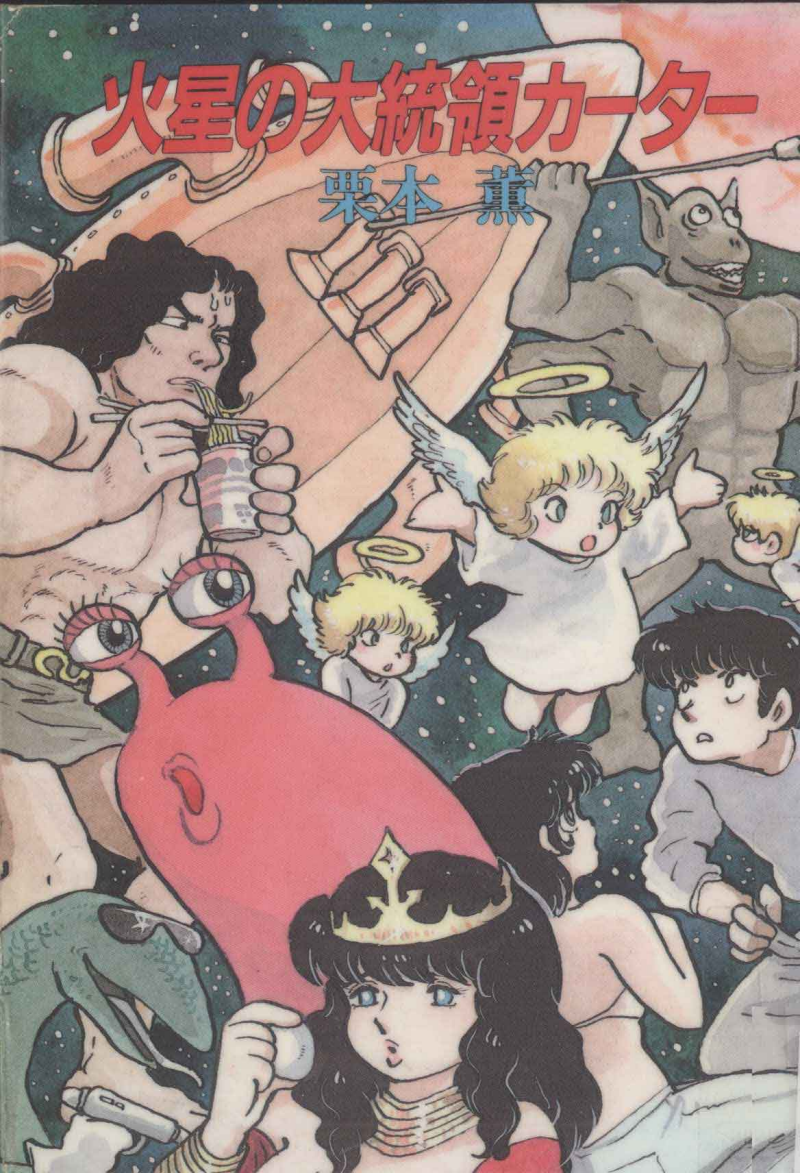
火星の大統領カーター

栗本 薫



著者略歴　昭和28年生，早稲田大学文学部卒　主著書「レダ」「風のゆくえ」「赤い街道の盗賊」「パロのワルツ」「白虹」「光の公女」「ゲルニカ1984年」（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

火星の大統領カーター

〈JA259〉

昭和六十三年三月十日　印刷
昭和六十三年三月十五日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　栗本薫
発行者　早川清
印刷者　矢島貞雄
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話東京（二五二）三一一一（大代表）
振替口座番号　東京六－四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・信毎書籍印刷株式会社　製本・株式会社川島製本所

ISBN4-15-030259-6 C0193

ハヤカワ文庫JA
〈JA259〉

火星の大統領カーター

栗本　薫

早川書房
2376

カバー・口絵／吾妻ひでお

〈挿絵〉

「火星の大統領カーター」横山えいじ

「エンゼル・ゴーホーム」いまい　かおる

「ロバート・E・ハワード還る」金森　達

「ナマコの方程式」吾妻ひでお

「最後の方程式」佐治嘉隆

目次

火星の大統領カーター　7
エンゼル・コーホイム　81
ロバート・E・ハワード還る　157
ナマコの方程式　197
最後の方程式　247
ハヤカワ・SF・スペシャル版あとがき　301
文庫版あとがき　309

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

火星の大統領カーター

火星の大統領カーター

挿絵／横山えいじ

その1　またはいいかげんなプロローグ

気がかりな夢からさめると、わたしは火星に来ていた。

どうして火星とわかったか、と聞かれても困るが、とにかくわたしは火星に来ていたのである。誰しもが地球にいるということなどことさらに意識しなくても、自らが地球上にいることを知っているように、わたしも目のさめた瞬間に、自分が火星にいることを、潜在意識の底で知ったのだった。

「トンネルを抜けると火星だった」

わたしはひとりごちた。

「エミー。エミーはどうしているだろう」

はからずも口にした愛娘の名が、わたしに自分にまつわるさまざまなことがらを思い出させた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

わたしの名はジミー・カーター。南部ジョージアの生まれだ。職業は、ピーナッ農場の農場主――いや、少なくとも、数年前まではそうだった。

数年前にあるひとつのおどろくべき出来事が、わたしの運命を大きくかえた。アメリカ合衆国の大統領にわたしは選ばれてしまったのである。そしてそれから、きわめて多事多難の四年間のあと、ロナルド・リーガンだかレーガンだかという、役者あがりの男のために、大統領の座をとってかわられ――そのあとはもう、思い出すのもシャクにさわる。

どうして自分が火星にいるのか、それについて、たしかな心あたりはなかった。ただ、わたしに云えるのは、ここ数ヶ月――すなわちホワイト・ハウスがもはやわたしのすまいではなく、レーガンというタカ派のものとなって以来、ずっとわたしはある種の厭世観にとりつかれていた、ということである。

わたしが敗北をきいた飛行機の中で男泣きに泣いた、というのをきいて、女々しいと考える人間は、おそらく男にとって野心というものがいかに巨大たりうるかを理解し得ない連中だろう。一介のジョージアの農園主であり弁護士にすぎなかった男が、一国の――それも世界でいちばん大きな強力な国家の最高権力者の地位につき、それからそれを失う――それは、よしんばわたしよりもっと豪胆な男にとってだって、平然と笑いすごすことはできない体験だろうと思う。真の勇気ある人間とは、何も感じない人間のことではないのだ。

ともあれわたしはアメリカ合衆国大統領ではなくなり、かわってナンシー・レーガンがファ

ースト・レディーの座についたわけである。ロザリンもかわいそうに！――しかし、わたしは自分のことで手いっぱいだったので、家族たちのことにまで気を配ってやるゆとりがなかった。

わたしは、わたしのやり方は正しいと信じていたし、それなのにわたしの国民がわたしよりも三流役者を選んだ、ということで、ひどい敗北感にとらわれていたのである。わたしはそこで、気晴らしに、毎夜、何年ぶりかに戻って来たカーター農園のバルコニーに立って、夜空を眺めるという新しい習慣を身につけていた。

それはいささかなりともわたしに現世の憂さを忘れさせ、より壮大な空想にさそってくれる時間だった。そうだ――！　あの下らないパルプ雑誌がたえずまきちらしている下らないお伽話のように、あの空の上へ行けたら、なにも国内のささいな評価によって自分のすべてを規定し去ってしまうこともあるまい。わたしは星々を眺め、それらをアメリカが征服してゆく空想にふけった。なかんづく赤い星、火星――いや、ダメだ。火星はどうもいけない。あれは軍神マースの星である。戦闘と、攻撃欲と、野蛮な侵略――それは、あのタカ派の男に所属するものだ。

いや、わたしは夜ごと、夜空に両手をさしのべ、そこへいってみたいと望みはしたが、ことさらに火星へいってみたいと願ったことはなかった。むしろわたしが行ってみたかったのは、金星――ヴィナス――愛と美の象徴――であって、なぜなら、さぞかしそこには、その名が半分も誇大広告でないとすれば、美しい女性――もっと俗な表現をつかうとすれば、きれいなね

ーちゃん――が大勢いるだろうし……

「あんたなあ。そう、難しい注文をつけられたって困るがな」

突然、わたしの耳のはたで声がした。

わたしはとびあがり――文字どおり六フィートもとびあがったのだ。わたしは自分がばったになったのかと思った。

「誰だ」

まわりには、誰もいなかった。わたしはきょろきょろした。

「あのなあ、カーターさんや。あんたは、特にどこにゆきたい、と強うは念じなさらなかったろうが。そやから、わしは、いっちゃん確実で割安の、火星コースにあんたを送りこんでやったんやで。そらまあ、どないしても金星がええ、ちうなら、いっぺん乗りかえてもろて、金星におつれしますがな。しかし金星いうたかて、あんさんの思てるほど、ええとこやあらへんで。大体金星のおなごちうたら、たまにゃドゥアーレーみたいなべっぴんもいてるけど、おおむねみんなデブのおばはんなんやから。わてなら、デジャー・ソリスでこらえとくけどなあ」

「砂漠（デザート）――なんだって？」

わたしは思わずききかえした。自慢ではないがいやしくも合衆国大統領というほどのものは、下らない三文小説など読まないのだ。だから当然、デジャー・ソリスなんて知ってはいない。

「デザートちゃいまんがなデジャー・ソリス」

「デジャー・ヴューなら知っているが。第一、卵を生むような女、いかに美人でも興味などないね。わたしにはロザリンというものがある」
「ちゃーんと知ってて期待してるくせに、このォ」
目に見えぬ声が、目に見えぬ手でわたしの脇腹をつついたので、わたしは大声をあげた。
「何をする。そもそもきみは一体何ものだ。フランク・シナトラの手先か。なぜ、わたしを火星なんぞへつれてきた」
辛うじて威厳をとりつくろってわたしは云った。
「これはレーガンの陰謀にちがいない」
「ちゃう、いうてんのに。なんて、ガンコなお方や。これは――ちうか、この、あんさんが乗ってきやはったのはな、地球-火星サイコ・エクスプレスや。そうそうめったに乗れるもんやおまへんでえ。これまでに乗った人いうたら――あのお方はこの線の創始者やからともかくとして、ユリシーズ・バクストンさんやろ。それから……」
「そんなことはきいてはおらん」
わたしはどなった。
「これは一体何のまねだときいてるんだ」
「そやからサイコ・エクスプレス……」
「サイコ――何だと?」

「つまりでんな。人間精神の新しい地平が拓かれた！　いまこそ、不自由な肉体の殻を投げすて、まっすぐにとびたとう。翔ぶのが怖いはもう古い！　肉体よりいでて心の旅へ。愛に終わりがあって、心の旅がはじまる。あーだから今夜だけは、君を抱いていたい……」

「何をゴチャゴチャいってるんだ？」

わたしは呆れてきいた。

「お前は何ものなんだ。姿をみせろ」

「みせようにも、あんさんらのいうようなうつし身ちうもんがありまへんねん」

そいつはヘラヘラと云った。

「わては、サイコ・トラベル・サイトシーイングK・Kのツアー・コンダクターですねん。ひとことでいうとあんさんは、幽体離脱をしやはったんですな。あ、心配おまへん、うっとこのシステムも、はじめにくらべてえらく近代化されましてな。以前は、幽体が離脱すると、のこされた肉体は、仮死状態になり、それで死んだと思いちがいされて焼かれてしもたりしましたが、そのてのトラブルを避けるべく、わがサイコ・トラベル・サイトシーイングでは日夜技術開発に相つとめ、ついにこのほど画期的な新システム導入に成功いたしました。その新システムを使用すれば、幽体が火星ないし金星などへの観光旅行に出かけたあとも、本体は、一応仮死状態になることなく動きつづけ、従ってご家族や周囲の方々の誰にも真相を気づかれるおそれがありまへんな。むろん、あんまり時間がたって、本体が年とって死んでしまわれますと、

もどるところがのうなって、ほんまの幽霊になってしまいますから、このシステムは基本的に短期の観光むきですが——しかしむろんお望みとあれば、長期滞在システムに切りかえることもできます。合衆国大統領というてもしょせん、一惑星上の一国の元首にすぎまへんが、火星大元帥いうたら一つの星の最高位でっせ。それを狙われたらいかがだす、こんどは」

「イヤな奴だな、きみは。それじゃわたしが大統領選に敗北したことも知ってるんだな」

「そらもうよーく。厭世観いうんが、わてらの商売のお得意先でしてな」

「気分転換には、なるかもしれんな」

うろんな気分が消えたわけではなかったが、ふっと心がうごくのを感じて、わたしはまわりを見まわした。

そこが地球とちがっていることはたしかだったが、特にどこがどう、おかしいと指摘はできなかった。ちがうといえば、何もかも妙てけれんだし、しかしそれをいうなら一遍いったことのあるあの日本の景色だってずいぶん——いいんだ、放っといてくれ。どうせわたしは景色を描写する文学的な才能などないんだ。

「しかしそれはそれとして、もとのからだはそのとおり動いている、といったな？」

ひとつだけ、気がかりだった。わたしは目にみえぬ声に云った。

「へえ。気いつかれることはまずおまへんな」

「何となく、妙な気がするが——それじゃ、もとのからだは、このわたしがここにいるのにな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong